

文禄の役の狭間で

清正が連れ帰った宣祖の王孫達

新井 宏

十五年ほど前、『まんじ』九一号(2004.2)に「文禄の役の狭間で一清正をめぐる数奇な人々」と題し、高麗日遙上人のことも書いた。日遙上人は、文禄二年(1593)の晋州城攻略時に、近隣の河東の寺で捕らえられた十三歳の少年で、加藤清正の前に引き出されても怖れることなく、「独上寒山石経斜、白雲生處有人家」と書いて読上げた。唐末の詩人杜牧の「山行詩」の一部をもじったものであった。

それを見て、清正が熊本に連れ帰り、後に熊本本妙寺の三世の法灯を継がせ、清正の菩提を弔うことになった余大男のことである。

その際、ぜひ一緒に書きたいと思ったのが、李朝第十四代国王宣祖の長男臨海君の長子で、後に安房小湊日蓮宗誕生寺の十八代貫主となった日延上人のことである。

宣祖の直系長孫であり、世が世なら李朝十六代の国王になったかも知れない日延上人のことは、断片的な伝承はあったが、どうも記述がちぐはぐで、宣祖の王孫ということ

に便乗して創作された疑いも捨てきれず、書くのを躊躇ってしまった。

ところがこの十五年間に日延上人に関する資料収集もかなり進んだ。まだまだ宣祖の王孫とする確実な論拠はないが、日本におけるちぐはぐな伝承については、私なりに理解し得るようになったと思う。

文禄元年(1592)四月十三日、日本軍十六万名が釜山に侵攻して始まった「文禄の役」は、一番隊として西路を進む小西行長ら一万九千名と、二番隊として東路を進む加藤清正ら二万三千名が、互いに先陣争いをしながら、逃亡相次ぐ各地の州城を、無人の地を往くがごとく突破し、早くも四月二十八日には首都漢城府(ソウル)から南百キロの忠州に至った。

一方、李朝では、侵攻一週間後になってやっと、女真族との戦鬪で戦功のあった申砮を防衛軍の統括者に任命、募兵体勢を強化して数万名(二万名から十万名の諸説)を集

め、迎撃のため忠州まで南下させた。しかし、一番隊小西行長らの鉄砲隊の前にあえなく大敗してしまう。

申砦の戦勝を期待していた漢城府は大混乱に陥り、宣祖は食料庫に火を放ち、平壤へ脱出してしまふ。無防備状態となった漢城府は乱民により略奪され炎上する。

その直前まで、李朝では宣祖の王世子を誰にするか、党争に明け暮れていた。正室に嗣子なく、庶出の王子から王世子を選ばざるを得ない事情もあつて党争は激化していた。しかし漢城を捨て平壤に退却するに際しては、もはや分朝を設ける必要から、一刻の猶予も許されず、庶出の次男光海君を王世子と決めた。同腹の長男臨海君は気性が激しく人望がなく、宣祖が寵愛していた四男の信城君は、その直前に亡くなっていた。

たとえ臨海君に多少人望がなかったとしても、日本軍の侵略さえなければ、秩序を重んじる宗主国の明は長男の臨海君に勅許（誥命）を与えたはずである。だから、その長子で後に日延上人となる王孫が第十六代の王となったとしても決してあり得ない話ではなかった。

日本軍の快進撃は、戦国時代を経て戦いに習熟していた上に、新兵器の鉄砲の活用が何よりも威力を発揮した。

しかし、そのことよりも、前年豊臣秀吉が「豊臣政権成立祝賀の使節派遣」を強要・督促してきたのに応じ、日本

の情勢を探る目的を兼ねて派遣された「通信使」が、西人派の正使黄允吉と東人派の副使金誠一で正反対の報告をしたことが李朝に混乱をもたらした。

正使の黄允吉が「必ず兵禍あるらん」というのに、副使の金誠一は宣祖の内心を忖度し「大袈裟だ」と反対したのである。不幸だったのは、遣使中に李朝恒例とも云うべき政変が起こり、次男の光海君を王世子に担ぐ西人派が粛清されてしまっていた。宣祖は気休めとなる金誠一の報告に乗ってしまった、それまでせつかく防衛態勢を強化しつつあったのに、それさえ解除してしまった。これでは勝負になるはずがない。今日、日韓問題に積極的な手を打てずに傍観している文在寅大統領をどこかで連想してしまう。

五月三日には小西行長、加藤清正ともに無防備となった漢城に入城する。ここで後続の諸隊を待ち、一、二番隊は更に北上し、五月二十七日に臨津江の戦いに勝ち、続いて開城も落とした。

ここからは小西行長らの一番隊は平壤に向い六月十五日には平壤入城、加藤清正らの二番隊は分かれて咸鏡道に向い六月十八日には東海岸の安辺に本陣を置き、更に北進を続け七月十九日には海汀倉の戦いを制し、七月二十三日には長軀オランカイ（女真族）との国境に近い鏡城や会寧に入った。

この地は流刑人の配所のようなところで、中央に反感を

抱く会寧府使の鞠景仁らが李朝に反旗を翻し、宣祖の長男臨海君と六男順和君を捕虜として差し出す。二王子は宣祖の命で、咸鏡道や江原道で兵を集めるために派遣されていたが、清正の急迫にあい、いわば逃避行の状態で反乱軍に捕らえられていた。

政治感覚に優れた加藤清正は鞠景仁ら降将を統治に活用すると同時に、両王子やその王孫達を丁重にもてなす。後に臨海君らを利用して李朝との関係を築く絶妙なチャンスであった。王子達からは「手厚い保護を受け慈悲はまるで仏の如くであった」との感謝状を寄せられている。

その頃、ついに明が参戦した。七月十六日には第一次の明軍五千名が小西行長らの守る平壤を急襲するが撃退される。更には七月二十九日に朝鮮軍一万名が平壤を攻めるが多くの損害を出して撤退した。

日本軍は戦闘にはめっぽう強かった。しかし戦線が伸び切り兵站到苦しむ日本側は守勢にまわらざるを得ず、戦線が膠着して講和の機運が高まる。この間に、明の將軍李如松が参戦の準備を進めていた。

李如松は文禄の役が始まる直前、モンゴル系の倅拜（ホバイ）の乱を鎮圧して武名を挙げていた。その軍は総兵力四万三千名で、主として私兵によって構成されており、重火器まで備えていた。これに朝鮮軍八千名が加わり、本格的な反攻が始まったのは年が改まった文禄二年（1593）正

月六日である。

平壤を守る小西行長らは大軍の前に、やっこのことで平壤を脱出した。李如松が攻城戦よりも退路を与えて追撃殲滅する戦術を選んだからであろう。李如松は勢いに乗り漢城府に迫る。

石田三成ら三奉行は漢城での籠城戦を主張するが、兵糧不足が深刻な中で、小早川隆景らの主張する短期決戦、すなわち前進迎撃戦を選ぶことになった。これが文禄の役で最大の激戦となった一月二十六日の「碧蹄館の戦い」である。

李如松は歴戦の名将、主軍を騎兵で構成し二万名を率いて速戦に出たが、碧蹄館の地は鉄砲隊を主力とする歩兵の日本軍に有利であった。

先鋒隊を務める立花宗茂ら二千名は、初戦で明の先鋒二千名を破り、追撃して戦果を拡大していた。しかし明の新たな七千名に遭遇すると寡兵の立花らは戦いながら後退する。そこに明の主力が到着し更に中央を突破してくる。

しかし戦況不利な中で、小早川隆景らの先峰主力も到着した。手慣れた詭計で三方包囲策を採り、更に明軍主力の前に引き寄せる。

この作戦が成功して、両側背から鉄砲隊が攻撃すると明軍は大混乱を起してしまう。そこに中央正面から小早川隆景や宇喜多家の戸川達安が突入し、李如松の本隊まで迫った。あわや李如松を討ち取るかの展開となり、日本側は主

力本隊の到着を待たずに圧勝した。

そのため李如松は完全に戦意を喪失し、李朝の強い反対にもかかわらず講和に向う。

李如松はヨーロッパにおける傭兵隊のように、私兵を持つ戦争請負人で自軍の損失を望まなかった。

ところで、隆景と共に中央部から突入した戸川達安は。この頃、宇喜多家で二万六千五百石を食み、常に宇喜多軍の主力として出陣し、数々の戦功をあげ、国許では若年の秀家に替り「仕置」として国政を任されていた。実は後にこの戸川達安の室となったのが、臨海君の長女、日延上人の姉なのである。この件は詳しく後述したい。

碧蹄館の戦いに勝利したとは言え、戦線の伸びきった中で、漢城を防衛するのは相変わらず困難であった。漢城の石田三成ら三奉行は、加藤清正に咸鏡道からの撤退を厳命する。これが加藤清正と石田三成の対立を決定的なものにした。清正は咸鏡道を反乱軍も活用して良く治めていたからである。

清正が朝鮮王子二名（臨海君、順和君）を連れて漢城に帰還したのが二月二十九日である。清正としては、王子を日本へ連行して秀吉に謁見させるつもりであったが、講和交渉の進展にともない朝鮮側に返す方針が固まり、四月十八日になって二王子を釜山で伊達政宗に引き渡す。この時に前述の二王子が清正に対し感謝する旨の書状を書いた

のが紀州徳川家に残されている。

この間、臨海君の妃陽川許氏や子女の消息については何も知られていない。ただ臨海君の長女（七歳、後に庭瀬藩主戸川達安の室）と長男（四歳、後の日延上人）が文禄元年（1592）博多に至ったとの記録が『筑陽記』にある。しかし前後関係を基にして原文を再読すると来日は、二王子が明の勅使に引き渡された文禄二年（1593）七月頃が正しいと思われる。後に高麗日遙上人となる十三歳の余大男が肥後に送られたのもこの年七月だから、一緒に送られた可能性が高い。ちなみに日延上人が開山した福岡香正寺の『縁起』によれば

朝鮮御征伐之時加藤清正ノ手ニ捕レ兄弟姉君共三人也、本朝江来リ給ウ、兄日遙上人後肥後熊本：本妙寺開山是也、姉君ハ後備中二羽瀬ノ領主戸川氏ノ室トナリ給ウ

とあり、余大男（日遙上人）を日延上人の兄とする等の誤りはあるが、同時に来日したことを伺わせている。やはり余大男（日遙上人）と臨海君の幼い日延上人姉弟の間には、来日当初から接点があったのだ。

この時、臨海君は二十一歳、妃の陽川許氏もほぼ同年であったろう。李朝では一般的に早婚で臨海君も十三歳で陽川許氏を娶っている。日延上人の姉が生まれたのは臨海君十四歳の時になる。

もちろん、日延上人姉弟が日本に送られたのは、講和により李朝に引き渡された臨海君や順和君らの人質の代わりの意味を持っていたであろう。小湊誕生寺の末寺『瀧泉寺過去帳』によれば、来日後ふたりは加藤清正により、いったん秀吉に献上された後に、清正の元で密かに吾子として育てられたとある。

臨海君の長男、後の日延上人は、加藤清正のもとで育った後、博多法性寺で剃髪得度した。慶長九年(1604)十六歳の時に京都に上り本圀寺の学舎で三年間学び、その後関東下総の飯高檀林で二十余年間勧学し、遂に寛永四年(1627)四月三十九歳の時に小湊誕生寺の十八世の法灯を継ぎ、日延上人となる。庇護者の加藤清正が亡くなってから既に十六年を経っていた。実力による昇進であった。

この間、文禄・慶長の役の後の国交回復に進展があり、慶長十二年(1607)には、第一回の回答兼刷還使が来日し、翌々年には己酉約条も結ばれ、被虜人の送還が本格化する。しかし李朝においては、一六〇八年に宣祖が亡くなると光海君が即位し、臨海君を江華島側の喬桐島に配流した上、翌年には明朝による王位継承への干渉をおそれる大北派によって謀殺されてしまった。もはや臨海君の遺児のことなど完全に忘れ去られてしまっていた。

小湊誕生寺の十八代貫主となった日延上人は、その四年

後には日蓮宗の大騒動「不受不施問題」に巻き込まれる。当初、この問題は日蓮宗の基本「他宗派の者から施しは受けない、他宗派への施しはしない」という教義上の争点であった。しかし、江戸時代に入ると、例えば將軍家の法事のように、宗派の掟だから出られませんと言いきれない場合がでてくる。

しかも、江戸幕府の宗教政策は、仏教各派に総本山を置き、総本山をして派内を統率せしめるというものであった。そのため身延山久遠寺は関東諸本山の一つに過ぎなかったのに、日蓮宗全ての触れ頭となり、池上本門寺、中山法華経寺、小湊誕生寺等の上に立つことになる。その結果、「不受不施」論争は「身延対反身延」の抗争に発展してしまつた。

教義上の問題としては、権力者からも施しを受けないというのが正論で、末寺に至るほどその傾向は強かった。しかし幕府の統治機構に組み込まれた身延山久遠寺は、幕府の権威を利用してでもこの論争に勝利する必要があった。そこには家康の側室、お万の方の子息達、紀州の頼宣や水戸の頼房が身延山の後ろ盾となっていたこともあった。

結局、寛永八年(1631)には、「身池論争」の結果として、池上、中山、小湊ら諸寺の貫主等六名が流罪とされ、新たに身延山から後任が送りこまれた。

そのため、小湊誕生寺の十八代貫主に就任したばかりの日延上人も、伊勢神戸藩の一柳監物直盛の預かりとなり、

間もなく筑前博多の法性寺に赴く。幼いときに過した学舎の寺であった。

博多では、福岡藩主二代目黒田忠之の帰依を受け、寛永九年(1632)香正寺を興している。藩主黒田忠之の碁友達で、ある日、日延上人が忠之と碁を打つため登城しようとしたところ、川が増水して渡れなかった。そのため忠之が橋を架けさせ、石の橋柱に「上人橋」と揮毫したと言う。優遇されていたのであろう。

日延上人は十一年間香正寺に留まり、寛永二十年(1643)五十五歳の時に弟子日康に譲り、寺内の小庵に隠居する。更に万治三年(1660)に福岡妙安寺を開き、移住して隠居の地とし、寛文五年(1665)正月二十六日に七十七歳で寂した。

以上は比較的信頼できる資料に基づいて概説したものであるが、日延上人にはその他にもいくつかの寺院を開山したとの伝承がある。また後に戸川達安の室となった日延上人の姉に関してもいくつかの伝承がある。これらの伝承の中にも、注意深く検証すると、有益な情報がある。

東京芝白金に日蓮宗最正山覚林寺という小さな寺がある。この地は元熊本藩の中屋敷で、清正公堂や毘沙門天の他に加藤清正にゆかりの遺物を多く伝えている。

寺の縁起によれば小湊誕生寺十八世可観院日延上人が寛永四年(1627)に江戸に来て、寛永八年(1631)に開いたとある。寛永四年は日延上人が小湊誕生寺の十八代貫主になった年であり、寛永八年は日延上人が「不受不施問題」で誕生寺を追放された年の翌年で記述に齟齬がある。

しかし清正亡き後、二十年ほど経て、誕生寺貫主となった日延上人が清正の菩提を弔うために開山したと考えれば納得できる。その翌年の寛永九年、加藤家二代目忠広が改易されてしまったので、大寺とはならなかったが、熊本本妙寺で日遙上人(余大男)が清正を祀ったように、江戸で日延上人が清正を祀る構想があったのかも知れない。

更に、芝白金には、日延上人が慶長十九年(1614)に創建したとの伝承を持つ常徳山玄照寺という寺院が存在した。現在は世田谷区北烏山に移っているが寺伝によると、「玄照寺は、小湊誕生寺第十八世忠禅院日延上人が開山、覚隆院日諦上人が開基となり慶長十九年(1614)芝白金に創建した」とあり、「戸川家が開山以来の檀家で、庭瀬藩主戸川肥後守の奥方・日延上人の姉の信仰が篤く、現在もその子孫が寺門に尽くしている」と伝える。

しかも玄照寺の対面に在る日蓮宗寺院の自然山妙揚寺も、玄照寺と同じく慶長十九年忠禅院日延上人による開山と伝え、こちらの方も芝白金から昭和二年に移転して来たと言う。玄照寺も妙揚寺も院号を忠禅院としていて可観院

ことは異なるのが若干気になる。

その他にも、日延上人が江戸西之久保(虎ノ門)に開いたと伝えられる正法山円真寺も現在は白金台にある。

このように、芝白金には日延上人の開山と伝えられる寺院が四つもあった。これは単なる偶然ではなく、いずれも元熊本藩の中屋敷との関連によるものと思われ、伝承として見過ごす訳には行かない。その中でも、日延上人の姉との関係を伝える戸川肥後守とその子孫のことが気になり調べてみた。

戸川肥後守達安(1567～1627)は、宇喜多家の家臣で二万六千五百石を食み、文禄の役の始まった文禄元年(1592)頃から宇喜多家の摂政役(仕置)に就任していた。その年二十六歳である。

宇喜多家では、若年の秀家を支えるため三者と呼ばれる戸川、長船、岡の三家が摂政役を担当していた。

戸川達安が担当するまでの経過を辿って見ると、戸川秀安(達安の父)↓長船貞親(綱直の父)↓岡元忠(岡貞綱の父)↓戸川達安となっていて、その交替はいずれも寿命や健康などによっていた。

しかし、文禄三年(1594)達安は突如として宇喜多秀家からその座を解任される。秀家二十二歳の時である。

秀家が達安より長船貞親の子、長船綱直を寵愛し国政を

任せたかったためと言われている。そのため達安は長船綱直と対立し主君の秀家にも不満を抱くようになる。

そこにキリシタン問題が絡んだ。秀家の正室豪姫は前田利家の娘で豊臣秀吉の養女として嫁いで来たがキリシタンであった。長船綱直が慶長三年(1598)に亡くなると豪姫に随行してきた中村次郎兵衛が、摂政役に登る。

日蓮宗徒の多い武将たちの間で不満が爆発したのが慶長四年の「宇喜多家騒動」である。主謀者は戸川達安、岡貞綱、花房正成やそれを支援した宇喜多詮家(坂崎直盛)で、結局、彼らは徳川家康の調停で宇喜多家を去ることになる。しかしその翌年には、関ヶ原の戦いが起り、いずれも東軍に加わり家康のもとで領地を回復している。調略による出来レースであったかも知れない。

戸川達安には正室として長船貞親の女、継室として岡元忠の女、そして子女として八男五女が知られている。日延上人の姉は達安の室としての伝承があるが、武鑑等には記載されていない。

問題は八男五女の子女と正室、継室、あるいは日延上人の姉との関係である。

やや込み入った話になるが、まず八男五女を示す。

平助(長男)、娘(日置左門室)、娘(堀直景正室のち岡家重室)、娘(戸川又左衛門室)、娘(花房幸次正室)、正安(次男)、令安(三男)、安尤(四男)、安利(五男)、安吉(八男)、達躬(九

男)、娘(村上三正室)である。

この内、達安の領地三万石の相続は次のように行われている。

長男平助	捨扶持	三〇〇石
次男正安(1606～1669)	備中庭瀬藩主	二二三〇〇石
四男安尤()	備中早島旗本	三四〇〇石
五男安利(1616～1664)	備中帯江旗本	三三〇〇石

長男平助がなぜ廃嫡されたのかは定かではないが、生母が達安と対立した長船綱直の姉妹であったのが原因だと考えるのが合理的であろう。おそらく達安が宇喜多家騒動によって宇喜多家を退去し、家康に仕えるようになった慶長四年(1599)頃には正室が去り継室が入ったのであろう。

そうであれば戸川家の家督を相続した次男正安は慶長十一年(1606)生れなので継室を生母としたと考えられる。

なお、達安には、長男と次男の間に、四人の娘がいたが、そのひとりが慶長九年(1604)生れの堀直景(上総荻谷藩主)の正室になっていることからみて、正安と同じく継室の娘であった可能性が高い。

さて、おそらく継室が正安を生んだ頃、二十歳になっていた日延の姉が戸川家に入ったと思われる。まだ清正存命中であったが側室の扱いであったようである。

次男正安の後、令安、安尤、安利と男子が続き、五男安利が生まれたのが元和二年(1616)である。継室が戸川家に

入ってから十六年ほど経ち、既に後継者の正安を得ていたことから、日延の姉が五男安利を生んだ可能性が高い。

それは、備中帯江を所領とした五男安利の帯江陣屋によれば、菩提寺は世田谷区北烏山の玄照寺とあり、その玄照寺では「小湊誕生寺第十八世忠禅院日延上人が開山、覚隆院日諦上人が開基となり慶長十九年(1614)芝白金に創建した」とある。

通常、開山とは創立、開基とは寺の基盤をつくることであるから、日延上人開山というのは「後付け」の印象が強い。しかも「戸川家が開山以来の檀家で、庭瀬藩主戸川肥後守の奥方・日延上人の姉の信仰が篤く、現在もその子孫が寺門に尽くしている」ともある。

池上本門寺に隣接して、戸川達安が開基の役割を果たした不変山永寿院がある。そこには達安とその室の墓が並んで建つが、日延上人あるいは日延上人の姉の伝承は全く見られない。かなり傷んでいる室の墓石を読んでみても、正法院日性神尼、寛永二年(1625)七月四日没とあり、日延上人の姉の本樹院妙慶日法、万治元年(1658)八月六日とは異なる。

墓を造ったのは当然後継者となった次男正安であり、自分の生母の名を墓石に刻むはずであるから、ここに継室の法名は正法院日性神尼と確定して良いであろう。ちなみに不変山は達安の院名で、この永寿院一帯五千坪は庭瀬藩の

屋敷跡の寄進を承けたものという。

いわば備中庭瀬藩の戸川本家には伝わらなかつた日延上人やその姉のことが、五男安利の備中帯江の旗本戸川家の菩提寺玄照寺にのみ残っていたのである。ここに五男安利の生母が日延の姉と確定できたと思う。

さらに言えば、三男令安、四男安尤の生母もあるいは日延の姉であつた可能性が高い。

長い探索であつた。學術調査と言うほどのものでもないが、十五年間も気にしていたことが、やっと片付いた気分である。

ただし、タイトルの付け方では随分迷つた。王孫達を基準にして言えば「人質」、「捕虜」あるいは「拉致」などを使うべきかも知れない。しかし彼らの日本における数奇な人生を知ると気持ちになじまない。だからと言って「連れ帰つた」とは、随分無責任な用語である。

文禄・慶長の役で拉致された朝鮮人は、内藤雋輔氏の研究によれば、少なくとも二、三万人に上るといふ。ポルトガル等に奴隸として売られた事例も多かつたであろう。

その中で、朱子学を伝えた姜沆、熊本本妙寺で清正を弔つた余大男(日遙上人)、小湊誕生寺貫主となつた日延上人、あるいは李朝では賤業とされていた陶工達は、生活面だけ見れば、日本で厚遇されて過した。

北朝鮮による拉致被害者たちも特殊工作機関の監視下

とは言え、生活面では別世界のエリートとして扱われ厚遇されていたという。

高麗日遙上人が「拉致」されたのが十三歳の時である。横田めぐみさんが「拉致」されたのも十三歳の時で既に四十年以上の年月が経過している。

それがどうしたのかと問われそうであるが、人はそれぞれ与えられた時間のなかで精一杯生きている。

最後に、途中に挿入すると流れが途絶えてしまうので割愛した、断片的な情報も書き残しておきたい。

星梅鉢の家紋を持つ家系を紹介した『武家家伝』の戸川家の項に、たまたま「達安は……朝鮮の役では加藤清正をオランカイ境に援け、また小早川隆景とともに碧蹄館で明軍を打ち破つた」との記述があつた。

文禄の役で総大将を勤めた宇喜多秀家の主力武将、戸川達安が咸鏡道のオランカイ境まで進出したとの記録はどこにも見当たらないが、清正が石田三成ら三奉行の厳命を受けて、漢城に引上げた際に、達安が清正の立場を擁護した可能性がある。ともに日蓮宗の熱心な信者であり、武将としての実績も良く似ている。その時、達安と清正の交友が始まり、臨海君の幼い姉弟のことを見知つたのではなからうか。

池上本門寺に隣接する永寿院に達安と継室岡豊前守元忠の女の墓があったことは既に述べた。

実はこの永寿院とは偶然ながら縁を持っていた。妻が日蓮宗の信者で、しかも永寿院の崖下にある大森四中の卒業生であり、しばしば本門寺境内を散策していた。その時、永寿院より奥まったところに、シエリユウという瀟洒なフランス料理店を見かけた。自分たちだけのお店のよう感じて時折利用していた。別に決めていた訳ではないが、ロゼワインを飲んでいた。

ところが、歴史の関係で知り合った方と話している内に、その方もご家族で良く利用していることを知った。調べてみると、現地ではかなり名の知られたお店とのこと。

そうこうしている内に、知り合いの読売新聞記者から、永寿院の境内から古墳が発見されたとの連絡を受けた。直系四十メートルほどの堤方権現台古墳である。

都心での発掘で有り、結構大きなニュースだったので、直ぐに見学に行った。もちろん古墳に興味があったからであるが、それよりも一部分で堤方権現台古墳と重なって万両塚と言う大規模な墓があって吃驚した。建設費が一万両にも及んだので万両塚と名付けられたとのこと。

徳川家康と側室お万の方の孫娘・芳心院の墓だと言うが、堀を巡らせた方形の石造墳は、どこか古墳時代の方墳を思わせる。

芳心院は紀州徳川頼宣の娘で鳥取藩主池田光仲の正室

である。そういえば、鳥取には古墳時代に最も多く方墳が作られていた。

主として参照した研究書には次の二編がある。

① 近年の研究進捗状況を良く伝える文献としては、寺尾英智「可観院日延に関する覚書」『日蓮教学研究紀要』四〇号、二〇一二年、一〇二十一頁。

② 文禄・慶長の役の被擄人に関する総合的な研究としては、内藤雋輔『文禄・慶長役における被擄人の研究』東京大学出版会、一九七六年。

その他、巷間の断片的な情報については、上述の二編の孫引きの他に、インターネット検索を多く利用した。